

屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

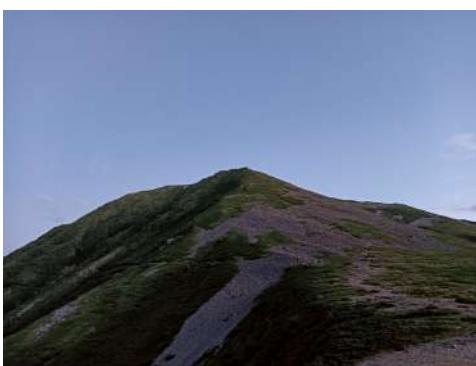
作成者：村上 慧

2025年8月29日

はじめに

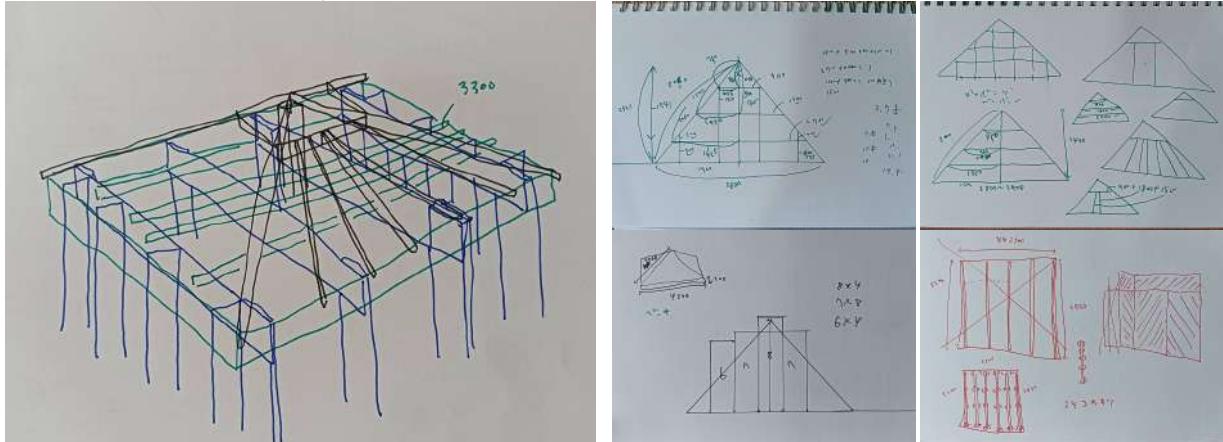
暑い日が続いている。観測史上最高気温を1週間で2回も更新したとか、40度越えが4日連続あったとか、気候変動に関するニュースがいろいろ出ているけど、身に受ける体感としても夏はどんどん厳しくなっている。特に東京はひどい。これだけ暑いと、短い文章しか書けなくなる。昼間、ドアを開けて一歩外に出た瞬間の非日常感は、なにかイベントでも始まるのかと思ってしまう。人間を苦しめようとする「意志」のような存在すら感じる。湿気による呼吸のしにくさは、サウナに似ている。誰かが空に巨大な膜でもかけてるんじゃないかな。街に、汗をかいていない人間がいない。ばっちりメイクをした勤め人も、肌着みたいな服でうろついてる老人も、小学生も高校生も、一人残らず汗をかき、難しい顔をして歩いている。私が小学生のころは、教室に冷房はついてなかった。職員室のドアを開けたときの冷気のありがたさをいまでもよく覚えている。あのころのエアコンは、いまよりもずっと特別だった。季節限定のスペシャルフレーバードリンクのような存在だった。実家の茶の間にエアコンはなかった。2階の寝室にはあったけど、どんなに暑くても夜には必ず消して寝ていた。それでも寝ることができた。今は無理だろう。最近の小学校にはちゃんと冷房ついてるのかなと思って調べてみたら、全国ではほぼ100パーセントの普及率らしい。よかった。こんな気温で授業が頭に入るわけがない。東京に比べて、勉強堂がある千葉県山武市はだいぶマシな気候で、7月上旬でも窓さえ開ければ車中泊ができる。日中の暑さは過酷だけど、アスファルトのせいで地面からも熱気が上がってくる東京よりははるかに「まとも」な環境だ。平坦なアスファルト舗装の道路では歩く喜びもない。

このあいだ初めて本格的な登山に挑戦した。常念岳という標高2800メートルの山に友人たちと一泊二日で登頂した。登りだけで7時間かかったが、登山道には石がごろごろしてる道や、沢の中で水をぴちゃぴちゃさせながら歩ける道や、木の根っこを乗り越え乗り越えていく道など、いろいろな趣があって、退屈しなかった。体感として、最も疲れたのは登山道に入る前のアスファルトの道だった。わずか40分程度のその道が、7時間の登山のなかでいちばんキツかった。ただ先に進むためだけに作られた、綺麗で平らな道。確かにつまづくこともないし、車も走れるし便利なのかもしれない。でも、ただ足を左右交互に動かす動作を繰り返しているうちに、なんのために歩いているのかわからなくなってしまった。道の先ばかりを見て、カーブを曲がるたびに「まだ続くのか」「まだ終わらないのか」と何度も肩を落とした。この調子で2800メートルを登りつづけることを想像したりして、愕然とした。



登山道に入つてからは、足元を見るのに精一杯で道の先をみる余裕がなくなり、それが結果的に楽しい記憶として残っている。先ばかり見ていたら、すべては退屈な作業になってしまう。足を前に進めながら、人が生きるために必要なエネルギーは、どう考えても結果より過程から得るほうが大きいな、と思った。登山道では足をおろすポイントの選択を常に迫られる。石から石へ、根っこから根っこへ。足元を見ながら行う、そういった小さな選択が、その瞬間に輝きをもたらし、その選択の連続が、歩くという行為に喜びをもたらしてくれる。選択を積み重ねることで、最初は人見知り同士のようにぎこちなかつた道と足の距離がだんだんと縮まり、足元に光が宿っていくようだった。

今号ではおもに本堂の【屋根の制作】と【床・天井・ドアの制作】を時系列で報告する。この報告書の執筆に着手したのが7月12日。作業してからだいぶ時間が経ってしまっているので、記憶が遠ざかる前に終わらせたいと思ってるけど、さて、書き終えるまでに何日かかることか……。



【屋根の制作】

上の写真は屋根の制作にあたって描いた「設計図」と「木取り図」である。私が私に伝えるために描いているもの。こんな適当な図でも、描かなければどの材料がどのくらい必要なのかを考えることができない。たとえば左の絵では、屋根一面あたりに必要な垂木が何本かを（黒い線が垂木）、右側の左下では、屋根一面あたりに必要な波板の長さと、その枚数（6、7、8という数字は「尺」を表している）を、それぞれ検討している。以下、日記形式で作業の行程を報告する。

屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日

5月19日



屋根の制作を始めた日。本堂中央付近の地面に羽付ピンコロを埋め込み、その上に（前回の報告で）購入した杉の柱を載せる。柱は、本堂の骨組みに渡した木材で挟み込むかたちにする（左上写真）。そのうえで柱が垂直になるようビスで木材に打ち付けて固定する。それからピンコロと柱をボルトビスで固定（左下写真）。こうすることで一人でも大黒柱を立てることができた（下写真/ぴょこんと飛び出しているのが大黒柱）。



米梅の角材（以降「隅木」と呼ぶ）を柱のてっぺんから本堂の四つの角に渡して、一方の端の断面が柱と同じく垂直になるように切り落とす（左下写真）。柱の方も隅木が載りやすいように角を鋸で落とす。（右下写真）



四つの角の方も、隅木が載りやすいように角を落としておく（右写真）。この作業を四回繰り返す。

それから四本の隅木を柱の頂点（かき合い）に固定する。ホゾを彫って木を組むような技術はないので、かき合いの固定には「タルキック」という垂木を垂木に固定するのに便利な既製品や、「トルクス」と呼ばれる六角形のネジ頭を持つ太いビス（一般的な十字頭のビスよりも太くて長くて丈夫そうだったので、専用ビットと一緒に購入した）を、下手な鉄砲数打ちゃ当たる的な発想で打ちまくった（次ページ冒頭の写真）。見た目はあまりかっこよくないけど、屋根が載ったらどうせ見えなくなるし、部品の劣化を考えてもとりあえず100年くらいはもつだろから、まあこれでいいか判断した。



屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日



<メモ>

いま「ホゾを彫る技術はない」と書いてしまったけれど、正確に言えば、私はノミで木をある程度狙った通りに削ることはできるので、固定する先の木に穴を穿って、その穴に入れる突起を固定したい木材から削り出し、穴に突っ込んで固めることも、時間をかければできるだろう。時間を惜しまず、一ヶ月くらい費やせば、ビスを一本も使わずに屋根を組むことだってできるかもしれない。でも私はそうしなかった。なぜならとても暑くて細かい作業をする気になれなかつたし、人生は短いからである。

人生は、どの程度のポイントで打ち止めとするかの決断—「今回はこれでよし」という判断の繰りかえである。たとえば1日ぶんの日記を書くのに、何日もかけてはいられない。それでは「日記」にならない。台風の進路予想をするため、気象条件のシミュレーションに半年もかけてしまうようでは、予報が確定するころには台風はとっくに通り過ぎている。それでは「予報」にならない。前回の報告で書いた「機能さえ備わっていれば、あとはさほど重要ではない。つぎはぎでも寄せ集めでもなんでもかまわない」という話は、つまり「時間を止めるることはできない」という現実と、有限な時間を生きる存在である私との、折り合いの付け方の話である。

とりあえずある程度の期間、「柱と隅木をくっつける」という機能を果してもらうことが重要なのだ。そういう観点から見ると「ビス」と「インパクトドライバー」は非常に頼もしい道具である。それは専門的な修行が必要だった建築の技術を、限りなく民主的なものとして開いてくれた。私の制作はインパクトドライバーとビスのおかげで成り立っている。



こうして4本の隅木を大黒柱の上に固定（左写真）。夜、小屋組に必要な米梅材を買うためにカインズへ。寝室と化しているファントムの荷台部分を片付けるのが面倒だったのでルーフキャリーに積む。明日からは隅木のあいだにこの米梅を渡し、垂木を垂らしていく作業。



5月20日

この行程に思いのほか時間を要した。昨日からは一転して天気は快晴で、午前中はまだよかったのだけど正午をまわってから気温がぐんぐん上がり、15時で体力的な限界がきた。米梅材は硬くて重くて、取り扱いが大変だった。左下の写真を見ればわかるとおり、隅木には角度がついているので、打ち付ける横材の端もそれに合わせて切り落とさなければならない。ひとつひとつのポイントに木をあてて線を引き、丸鋸で切断し、もう一度あててみて、合わなければ微調整する、という作業の繰り返しで、この日は結局屋根1面分が終わったところ（右下写真）で終了。



屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日



<とつぜんのホテル宿泊レポコーナー>

私が土地を買ってからずっと、村上勉強堂の周辺は宿泊施設不毛地帯だった。去年のGWに大勢の友人たちが手伝いに来てくれた時も、ホテル泊の友人を迎えるために車で30分ほど走らなければならなかった。今回も新たな友人が作業の手伝いに来てくれることになり、ダメ元でもう一度Googleマップで「ホテル」を検索してみた。そして勉強堂から車で十分のところに「R9 the yard」という、客室も受付カウンターもすべてがコンテナでできている面白いホテルがオープンしていたことを知った。屋根の上の作業ですっかり疲れてしまっていたので、試しに泊まってみることにした。

5月20日から一泊、素泊まり、公式サイトからの予約で6600円。安い時は5000円で泊まれる日もある。プランは素泊まりしかないのだけど、予約サイトには軽食がついていると書かれていた。なんのことだろうと思っていたら、チェックインの時に、冷凍のお弁当が一人ひとつもらえるとの説明を受けた。私は「焼きうどん」（左写真）を選んだ。他にも「ビーフピラフ」「鶏ごぼう弁当」「麻婆茄子弁当」などがあった。部屋のレンジで温めて食べたけど、普通に味がよくて感動した。

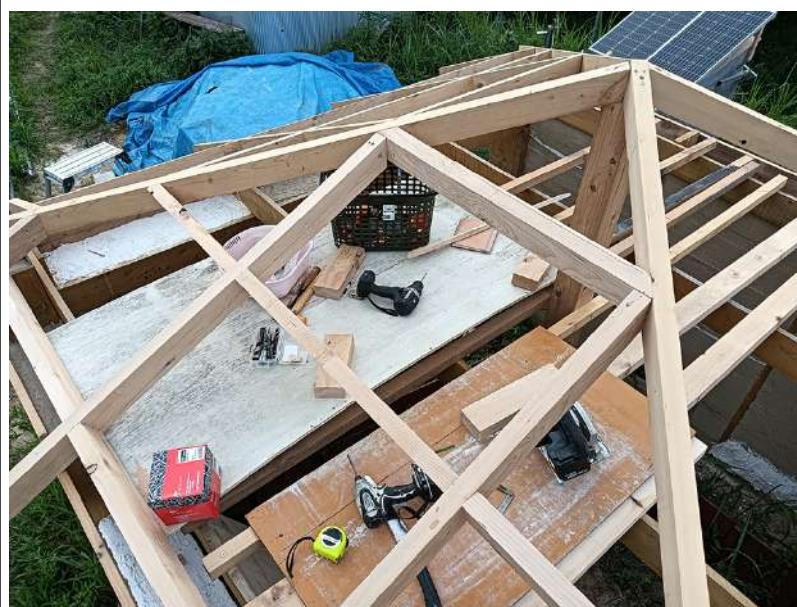
部屋の中は一般的なビジネスホテルくらいの広さで、オープンしたばかりということもあり、清潔で居心地がよかったです。一部屋一部屋が独立したコンテナなので、壁に腕をぶつけたりして音を立てても気にしなくてよさそう。今後も、めっちゃ疲れた日とか、豪雨で何の作業もできないような日は利用していくたいと思った。



夕方、いつもは「湯楽の里」や「カインズ」にいくときに車で通るだけの街道を歩いてみた。タイヨーというスーパーで買った「アサヒ ザ ビタリスト」という缶ビールを片手にぶらぶらと。日が暮れかけていて、家路につくものとおぼしき自動車が激しく行き交っていた。歩いている人間は私の他にはひとりもいなかった。ビールは苦くて、正直好みではなく、車の通りも激しくてせわしない環境ではあったけど、久しぶりに無目的にふらふらと歩く時間をすごして解放的な気持ちになれた。すでに入浴を済ませていた体にあたる風が気持ちよい。Laushubという、最近知ったテクノポップの二人組バンドの曲を聞きながら歩いていたら、共産主義時代の遺跡みたいな廃墟を見つけた。日本に共産主義時代はなかったはずだが、もしかしたら、きっとこういう遺跡が各地に残っているだろなと思った。



5月21日～24日



骨組みの上に合板を載せ、本格的に作業スペースを確保し、およそ1日に1面のペースで小屋組（屋根の骨組み）を作った。下の写真は、角度のついている隅木にあうように横材の端をカットして打ちつけた様子。



屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日



左の写真は、本堂の骨組みに垂木を打ち付けるときに「タルキック」という特殊なビスを使って打ちつけた様子。100mm以上ある長いビスで、ネジ穴も四角形だったので専用のビットが必要なのだが、ネジの部分が先端にしかないのでも、角材と角材を隙間なく繋げるのに便利。



○蜘蛛の家掃除

作業中に衝撃的な発見をした。右の写真は本堂の骨組みに張られていた蜘蛛の巣。私が屋根の上で木を切っているせいで大量に木屑がついてしまっている。この家の主が、その木屑をせっせと落として巣を掃除していたのである。写真をよく見ると縦糸（中心から外に向かって伸びている糸）にはあまり木屑がついていないのがわかるかと思う。蜘蛛は器用に口で木屑をくわえ、巣の下にぼろぼろと落としていた。木屑がついていたら歩きにくい（蜘蛛は粘着性のない縦糸を伝って移動する）からなのか。なんにせよ蜘蛛の綺麗好き一面を初めて見た。また別の蜘蛛が、壊れた巣の糸を集めて食べているところも目撃した。体内で新しい糸になり、巣作りに使われるのだろう。蜘蛛の巣は、拡張した身体なのである。



○いつかはどうにかしなきゃいけない問題について
屋根の小屋組が完成するまでには5日を要した。作業としては40本程度の角材を打ちつけるだけなのだけど、作業中、ところどころで何かと考え込んでしまって手が止まり、時間がかかった。たとえば角材を75mmのビスで打っている最中にふと「本当にこの長さでいいのか？ もっと短いほうがいいのでは」と、自分への問いかけがはじまる。それまでずっと、何本もの角材を同じビスで打ってきたのに。また木材を切る時にも、絶えず「本当にこの長さでいいのか？ 本当に？」という声が頭の中でささやいてくる。なぜそうなってしまうのか。それは設計図がないからである。設計図という、自分への命令を下してくれる存在がいない以上、作業のひとつひとつに常に選択と決定がつきまと。結果、それまでずっと75mmのビスで打っていたのに、何本かだけ60mmのビスを使ってみたり、逆に105mmのビスを使ってみたりと、一貫性がなくなる。

不安は暴走していく。「ビスはこの長さでいいのか？」という簡単な問いは、すぐにビス以前の問題、例えば「木材の長さはこれでよかったのか？」になり、「そもそもこの骨組みは強度的に大丈夫なのか？」になり、ついには「版築壁は大丈夫なのか？」急に崩れたりしないのか？」と、より根源的な、いまさら考えてもどうしようもない問い合わせに発展してしまう。

例えば上の写真で白い部分が目立つ壁は、昨年4月から着手した版築壁の一枚目で、このころはまだ版築の突き固めに慣れていたので、層と層のあいだの接合が他の壁と比べて弱く、強度的な不安がある。とうぜん「この壁は本当に大丈夫なのか？」という不安が常に頭のなかでぐるぐるしているが、いまからこの壁を取り壊して新しく作り直す気力もない。いまさら考えても仕方がないことはわかっているし、これ一つを解決した所で新たな不安が発生することもわかりきっている。

コンポストトイレについての不安もある。トイレの穴はすでに排泄物と落ち葉でいっぱいになっている。それらを取り出す横穴も開けていないので、いつかはどうにかしなきゃいけない（スコップなどで掻き出しか、頑張って横穴を開けるかの二択）。中古で購入した車のETC車載器は、以前の持ち主の名義のままで、まだ変更できていない。やらなきや、やらなきや、とは思っている。車のタイヤにもヒビが出てきたので、いずれは新しく買わなければいけない。あと、10年以上前につくった銀行口座のカードが最近出てきて、残高が残っているのかどうか知りたいけどパスワードがわからず、窓口に行って暗証番号の確認をしたいけど、銀行は香川県にあるからなかなか行かれない。でもいつかは確認したい。髪も伸びてきたのでそのうち切らなければならない—人生に溢れている、いつかはどうにかしなきゃいけない問題たちが、黙々とビスを打ったりしているときにふと蘇ってくる。人は生きれば生きるほど時間がないもんだ、と誰かが歌っていた。子供の頃は、いつかはどうにかしなきゃいけない問題のことなど頭になかった。その瞬間のことでいっぱいいっぱいだった。こういった問題たちがひとつ残らず解消され、解放される日はくるのか？ くるのか？ はわはわはわはわわ・・・

屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日

5月26～27日



アーティストで、東京のアトリエのシェアメイトでもある田原唯之さんが勉強堂を手伝いに来てくれた。車中泊の一泊二日で、到着した日の夜は、「湯楽の里」で合流予定のところ、到着した時には入館可能時刻を過ぎていて、田原さんだけは温泉に入れなかつたというトラブルはあったが、いい夜だった。コンビニで酒とおつまみを買い、深夜1時過ぎまでガレージでワインをちびちびやりながら話しこんだ。勉強堂は静かな環境なので、草や土の匂いを感じやすいし、虫の声の存在感も大きい。そこから、幼い頃の思い出に話が発展したりする。田原さんの勉強堂の立地に対する感想としては、「駅近物件じゃん！ 駅があるとホッとするね。孤島にならなくて済むというか、駅がないだけでぜんぜん違うんだろうな」「ここは”気”がいいね、セブンからの眺めひとつとっても、いい」とのこと。



27日は朝から屋根の合板の捨て張り作業。最終的にこの合板は波板の下に隠れて見えなくなるが、防水シートを貼るためにには不可欠なものだ。それなのにどういうわけか「捨て張り」と呼ばれている。なんだかかわいそうなネーミングである。

田原さんは普段からさまざまな工具を使っているアーティストなので、インパクトのスキルや板を切断するスピードが私よりもずっと速い。想像していたよりも屋根の勾配が急で、踏ん張るのに足腰の力が必要だったり、手元から滑り落ちたビスが屋根をコロコロを転がって地面に落ちる、という小さなアクシデントはあったけれど、ふたりいるおかげで作業はさくさくと進み、日が暮れる前に捨て張りは完了した。屋根の上で板を打つ人と、地面で板を切ったりする人に分かれることで、いちいち屋根に登ったり降りたりする必要がなくなり、スムーズにできた。二人だとだらだらする時間も減る。他の人が私を動かしてくれるというか、自分の体が人によって動かされている感じ。一人だとすぐに休んでしまうけど、人がいると頑張れる。効率という意味では、一人と二人とでは段違いである。たとえ一人が、作業に関するスキルを何も持ち合わせていなかったとしても、その場にいるだけで、もう一人の体を動かす力になったりする。この日は、田原さんがいるおかげで「選択と決定」の速度もぐっと上がった。さきほど書いたような「本当にこのビスでいいのか？」と考え込んでしまう無駄な時間が少なくなった。



田原さんの謎のポーズ



屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日

<木材に蓄えられた生命のエネルギーについて>

版築を長くやっていたおかげで、「木材」が持つ特性についても考えることができた。樹木は、それ自体が重力に逆らって上へ上へと成長する生物である。そして木材とは、その抵抗のエネルギーが蓄えられた物体と言える。このエネルギーのおかげで、木材は重力に対して比較的自由な振る舞いを許されている。それは垂直方向だろうが水平方向だろうが、無関係に四方八方に伸びることができる。対して土は無生物なので、重量の影響から逃げられない。版築作業を経たうえで、木材で骨組みを組んでいると、まるで無重力空間を自由に行き来できるかのように感じられる。施工スピードは段違いで、版築だと60センチの壁が立ち上がったら「今日は結構進んだなあ」と思っていたのに、今回はわずか1日で10平米もの捨て張り作業が終わつた。すべては樹木が蓄えた生命エネルギーのおかげである。

<とつぜんの執筆現場レポコーナー>

いま愛知県瀬戸市のファミレスでこれを書いているのだけど、左隣に座っている一人客のおじさんのことが気になって仕方がない。その唐揚げの口への運び方、味噌汁の飲み方、その他挙動の全てが気にさわる。いちいちが異常な速さだ。ただ速いだけでなく、スピード感にまるで節操がない。こんなに、人の食べ方が「無理だ」と思ったのは初めてだ。ものすごく急いでるんだろうか。箸で食べ物をつまむ瞬間まではよいとして、それを口に運ぶときに、なぜか「ビュンッ」と加速する。箸を口に突き刺すつもりなのか？ というくらいの勢いで「ビュンッ」と加速し、次々と食物をぶち込んでいる。なんなんだ、その加速は。なぜ、そこで加速する必要があるのか。軍隊かなにかに入っていたのかもしれない。少しでも早く食事を終えるために、年月を費やして編み出した食事法なのかもしれない。彼に悪気はないんだろう。

食べ物を口に入れてから、次の食べ物を入れるまでの時間がものすごく短い（ほとんど噛んでないんじゃないかな）こともまあ気になるっちゃ気になるけど、なによりもスピードだ。もっとも大きな問題は箸運びのスピードなのだが、食器を掴み、テーブルに戻す挙動も、いちいちが癪に触るほど乱雑で、速い。しかし「乱暴」とまでは言えないのがまた気持ち悪い。異常な速さではあるが、食器を置く音がうるさいわけでもないし、口から変な音をだしてる訳でもない。音が立つ瞬間と瞬間の間を狙って、暗殺者みたいに加速させている。その無音もまた気味が悪い。

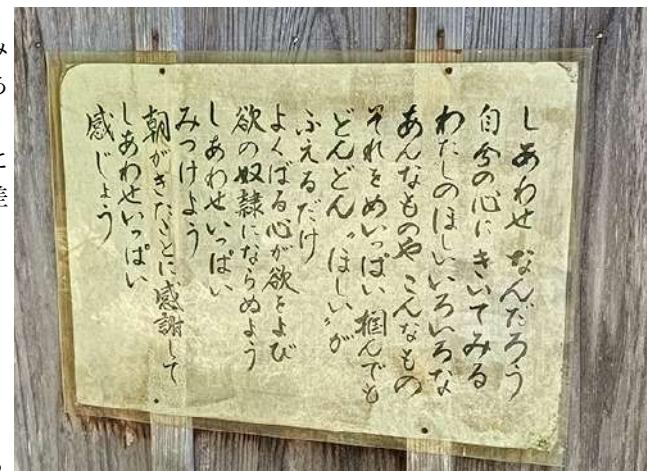
この人と一緒に住むのは無理だと思った。顔がものすごく好みで性格も優しくて気遣いができる、真面目に働いてコツコツ貯金もできて、なのにときどき冒険的で新鮮な一面も見せてくれる素晴らしいパートナーだとしても、食べ方ひとつで離婚の理由に思うと思った。そのくらい強烈な、本能的なレベルでの嫌悪感を覚えた。その人は2メートルほど離れた右の席に座っていたので、視界の端にちらちらとその挙動が映り込む程度だったのに、気になって仕方がなかった。先ほどの話に繋げるなら、人がその場に居ることが持つ力の大きさをひしひしと感じた8月15日。



○近所の湧水

田原さんがGoogleマップで湧水を発見したので行って飲んでみた。すこし臭みがあるが、大量の飲み水がタダで手に入るのはありがたい。

「木原の自噴水 この辺りは幸にも地下十数メートルのところに良質な水脈があります。先人達は孟宗竹の節を抜いて、水脈まで差し込むと水圧で自然に噴き出す水で生活をしました。」



壁にはありがてえお言葉も掲示されている

屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日

○ランドロームフードマーケットで汲めるRO水



湧水の話題のついでに、勉強堂最寄りのスーパー「ランドロームフードマーケット」で汲める水のことも書いておきたい。このフードコートには、以前「電子水」（報告書第十五号参照）のウォーターサーバーが置かれていた。それが数ヶ月前に「ピュアウォーター」に代わった（左写真）。説明によると「RO水とは、RO膜（Reverse Osmosis Membrane・逆浸透膜）で、水の不純物を最大限除去した「より安全・安心なお水」のこと、「純水」や「ピュアウォーター」とも呼ばれています」とのこと。要するに水道水を高性能フィルターにかけたものらしい。税込613円の専用ボトル（1家族につきふたつまで）を買えば、あとは無料で何度も飲用水（一度に最大8L）を手にいれることができる。

村上勉強堂で汲める井戸水は飲むことができない（できなくもないかもしれないけど、めちゃくちや鉄の味がするので、飲む勇気が出ない）ので、作業中に大量の水分が必要な夏場は特に、このRO水に助けられている。しかも、おいしい。ランドロームフードマーケットは、文字通り地域のインフラとして機能しているのである。

RO膜の不純物除去性能がいかに優れているかを教えてくれるありがたい表→

不純物をほぼ除去する RO膜！						
		一般の浄水機				
水処理方法	活性炭	中空糸	セラミック	イオン交換樹脂	UV（紫外線）	RO膜
除去項目＼技術	吸着	精密ろ過	吸着	イオン交換	殺菌	膜分離
塩素・カルキ臭	○	△	△	×	×	○
カビ臭	○	×	×	×	×	○
鉄粉・船	×	△	△	△	×	○
細菌	△	○	×	×	○	○
トリハロメタン	△	×	×	×	×	○
塩分	×	×	×	○	×	○
ミネラル	×	×	×	○	×	○
ダイオキシン	×	×	×	×	×	○
硝酸性窒素	×	×	×	△	×	○

○ 除去可能 △ 場合によっては除去可能 × 除去不可能

5月28～29日

雨が降ってしまったので作業はお休み。車中泊をしていたのだけど、雨の音で目が覚めて、リュックから耳栓を取り出し、耳にはめて、また眠る、という夢を見た。明け方、本当に目が覚めたときには、本当に雨が降っていた。でもさつきしたはずの耳栓をしていなくて混乱した。夢だと気がつくまでに時間がかかった。夢と同じように耳栓をリュックから取り出し、耳にはめて、また横になった。

5月30～6月1日



カインズでアスファルトルーフィングシート（屋根に敷く防水シート）を購入。棚から取り出そうとした瞬間、想定外の重量に衝撃を受ける。中に米でも詰まっているかのような重量。

このシートを捨て張りの上に敷き、タッカーで打ち付けて固定していく（左下写真）。21メートル巻を一本買ったのだけど、3メートルほど足りなくて、最後は余っていた厚手のブルーシートを二重に敷いた。



屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日

6月2日



近所のホームセンターコメリでガルバリウム波板を購入。グラインダで切断しつつ、ルーフィングシートの上に、波板用ビスで打ち付けていく。



上の写真のように、頂点は板金を叩いて曲げながら、波板と波板の隙間をカバーしていく。波板に関する一連の作業は1日で完了した（右写真）。



屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日

○この日、ランドロームのイトインコーナーでお昼ごはんを食べ、眠気に襲われた際に考えたこと
ご飯を食べた後に眠くなるということはつまり、ご飯を食べた後に眠くなれる、ということではないか。他人と一緒に行動していたり、誰かに雇われたうえで労働しているようなときは、ご飯を食べたあとも眠くなることがすくない。そのとき体は、食後の眠気を意識にのぼらせてこないようにしている。一人でいるときに限って、ご飯を食べ終えて数分経つと耐えがたい睡魔に襲われる。それはとてもわずらわしいことだが、逆に「眠くなることができる」というのは、社会化・平均化されていない身体を持っているということではないか。よしよし

6月19日



草刈りのあと、あらかじめ防水塗料を塗っておいた鼻隠しを垂木に打ち付ける（右写真）。外観が一気にシマった。

2週間ぶりに来てみたら、この草！例によって草刈りから1日が始まる。



本堂内部。床を作るための準備をする。もう遠い昔の記憶だけど、ユンボでここを掘り返した時に土留めとして地面に打ち込んでいた杭の、飛び出している部分をノコギリで切り、草をとる。

本堂の中は涼しい。外は灼熱だけど、この中でなら過ごせる。ただ壁が版築でできているというだけで、こうも違うのかと驚いた。測ってみたら外気温より3度ほど低い。あちこちに開けた窓から風が入ってきて気持ちがいい。これは冷房も期待できるのではないか。携帯の電波もすこぶる入りにくい。電波遮断機能まで備えているのである。書斎としては優秀ではないか。



<建設と生活のあいだ>

勉強堂をつくっていると、建設と生活の境界は限りなくあいまいになる。本堂の屋根ができてからは、ますますその境界がなくなっている。「建てる」と「暮らすこと」を、区別なく同時にやっている。建設は生活のための準備でありながら、生活そのものになっている。作業の手を止め、飲み物をのんで一服し、イヤホンから聞こえてくるオーディオブックの朗読に耳を傾ける、昼下がりのリビングのような休憩の時間を、まさに自分がいま建設している現場の中でとっている。ついさっきまで作業をほどこす対象だった床や天井が、自分の体を守り、休ませるためのシェルターに変わる。ご飯を食べた後は眠くなるので、ときには椅子にもたれかかって仮眠をしている。壁を立てる作業と、その壁にもたれかかって休む時間を交互に繰り返しているような感じ。

6月20日

のんびりと床を作っていく。まずは名古屋の「広告看板の家」プロジェクトのさいに購入して大量に余っていた防湿シートを床下に敷く（右写真）。こうすることで湿気を遮断し、カビを防ぐことができる、とインターネット上のDIYブログに書いてあったのでそうする。



屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日



近所のコメリで床材用の2x4材と、基礎用のハーフサイズのコンクリートブロックを買う。防カビのために塗料を塗って、乾かして、水平を取りながら床を組んでいく。水平をつくるために合板を切って適当な木片を作り、材とブロックの間に挟む。



防湿シートのせいで床下がまるごと蟻地獄になっている。虫たちにとって、シートのツルツルした表面はものすごく歩きにくいらしい。ダンゴムシや蜘蛛たちが、脱出できずに逃げ回っている。見つけ次第、外に逃がしながら作業したけど、きりがない。

本堂の中は1日中作業ができるほどには涼しい。外は暑いけど、ここなら居れる。東の窓からは風も入ってくる。外は30度近くあり、日差しの当たるところはもっと暑そうだったが、室内は、試しにおいてみていた温度計によると25~26度だった。ただ湿度は70%代後半で、体を動かしているうちに汗だくになる。それも水分をとて休憩しているうちに引いていく。それにしても、いったい梅雨はどこに行ってしまったのか。

6月21日

夜寝るときに、耳元で蚊の羽音がしたかと思って飛び起きたが、よく聞いたら遠くで踏切が鳴っている音だった。車中泊をしていると蚊の気配に敏感になる。

朝、日が昇るにつれて車がどんどん暑くなっていく。目を閉じて、ぎりぎりまでゴロゴロとねばり、もはやここまでか……と思つたら、パッと起き上がり、日除けとしてぶら下げているタオル類を一瞬で外し、その場で作業着に着替え、よし、と気合いを入れてから、網戸にしていた後部座席の窓を締め（窓を開けたまま車を走らせると風で網が剥がれてしまう）、急いで運転席に移動し、ひとまずドアを開けて外に出る。後部座席の窓を閉めてからは、秒ごとに車内の気温が上がっていくので、時間との勝負である。外は車内よりはるかにマシなので、そこでいったん息を整え、もう一度車に乗り込み、フロントガラスの遮光板を外してエンジンを掛け、窓を開けてコンビニへ顔を洗いにいく。この動きを毎朝繰り返している。

車のエンジンを止めずにエアコンをつけたままにしておくのが嫌いなので、コンビニの駐車場で車内にいられる時間は限られている。停車したとたん、すぐに車内はサウナ状態になる。朝ごはんを車内で食べるのが難しくなってきた。本堂は涼しいので、居場所になりつつあるのだが、まだ床ができていない。ここ数日が勝負だ。緊張感がある。夏が本格化して気温が上がるのが先か、本堂の内装（床と扉と窓）が完成するのが先か。

(右写真)

直射日光の当たる屋外に設置した温度計が34.9度を指していたのに対し、本堂の中は27.9度だった。
最も温度差が大きかった瞬間。



屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日



<とつぜんのコラムコーナー>

パレスチナの状況がまったく改善しない。まったく改善していない。まったくなにも改善していない。最近、外傷死だけを数えても死者数は6万人を超えてるという報道を目にした。しかもかなり少なく見積もられている数字で、メディアによっては9万人を超える数の死者が出ていると報道している。これは東京都狛江市の総人口に近い。子供の犠牲者も多い。支援物資を積んだトラックは国境で足止めを食らい、人為的な飢餓状態が作られている。人間が、人間の子供を飢え死にさせている。「ガザ人道財団」という、まったく援助になっていないどころか実質的にはパレスチナ市民への暴力を加速させている団体が活動しているが、名古屋市ほどの大きさ/人口のガザのなかで、彼らが食料の配給を行っているのは4箇所だけ。空爆は毎日行われており、そのなかで人々はそこまで歩いていかなければならず、無事にたどり着いたとしてもそこで銃撃されたりする。そんな惨劇が、天気予報みたいなノリで報道されている。あるいはSNSでは我が子の遺体を見て泣き崩れる父親の映像の次に「湘南なら3ヶ月で生える」という発毛クリニックの広告が流れてきたりする。外は暑すぎて、近所のコンビニの店員の生命エネルギーは枯渇しているように見える。正気を保つのがむづかしい。

6月22日のリアルタイム日記

21日の夜、都内の友人宅で急遽カードゲームをすることになり、車で向かい、深夜1時まで楽しく遊んだ結果、勉強堂に戻ってきたのが深夜3時前で、朝8時にはもう車内が暑くて目が覚めた。曇りだったらもっと寝ていられたが、空はあいにくの快晴で、例によってゴロゴロしているうちに車内の温度は刻一刻と上がっていく。「刻一刻」という表現がぴったりだ。後部座席の、網戸にした窓を締め、ぱっと運転席に移り、エンジンをかけてコンビニへ。顔を洗い、朝ごはんのマフィンを買って車に戻りつつ、これからどうしようかと考える。寝不足で鼻の調子が悪い。このまま作業を始めたら大変なことになるのはわかりきっている。もうすこし休んだほうがいい。工事中の本堂は版築の壁のおかげで外気温より3度くらい低く、わりと快適だが、工事中なので床は木片や木屑だらけで横になれない。コットを持ってくればよかった、と後悔する。

とりあえず車に乗ってみるが、暑すぎて1分もじっとしていられない。日陰が必要だ。太陽光が、あらゆるところに降り注いでいることを恨めしく思う。まんべんなくあたりすぎではないか。車で横になれたら一番いいのだが、どこもかしこも太陽光が降り注いでいる。文字通り、どこもかしこもだ。安息の場所はない。ただし車ごと日陰に入れるところが、ひとつだけある。「さんぶの森公園」の駐車場である。木陰になる駐車スペースが数台ぶんある。行ってみたら、幸いなことにひとつだけそのスペースが空いていた。車をとめ、後部（ベッドルーム）に移って横になる。太陽光があたるところとあたらないところで、その場に存在することの経験がぜんぜん違う。別の国、別の季節にいるみたいだ。太陽光から逃げられる場所はないかと車を走らせているとき、小説三部で、死の太陽から生き延びる道を探す文明を思い出した。

無事、1時間くらい昼寝ができた。体に危険な熱が残っているのを感じ、今日の作業は陽が傾いてからにしようと決め、駐車場から歩いて行ける図書館に涼みにいった。空調が効いていて、頑張ってなにかを食べたり飲んだりしなくとも居てよい場所というものが、図書館のほかにない。しかし図書館は寒かった。寒すぎる。日曜日なのに、人はほとんどいない。

屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日

クールシェアという言葉を思い出す。ぜったいに、空調が効いた部屋は何人かでシェアした方がいいに決まっている。地球のためにも、エネルギー節約のためにも。テーブルと椅子とソファがある涼しい空間をシェアすればいいだけなのに、そんな簡単なことを、宇宙に何千個も人工衛星を飛ばすことのできる私たちが、なぜ実現できないのだろう。共同体が失われたから？なにか食べるか飲むか読むかしないと、空調の効いた部屋にいることは許されない。図書館はなにかを読んでないと居心地が悪い気がしてしまう。なので、横山光輝『三国志』の2巻を読んだ。劉備たちが地方の警察署長に任命されるあたりのことろ。三国志はどうしてこんなに面白いんだろう。それは登場人物がみんな愛すべきアホばかりだからだ。みんな思い込みが激しくて、心身にエネルギーが満ちていて、どうしようもなくダメなところもあって、読んでいると虫籠の昆虫を観察しているような気持ちになれる。あっちで喧嘩してるとか、こっちは元気ないな、とか。



ランドロームでお寿司を食べて、アーリウスでパソコン作業をする。マンゴーラッシーだけ頼んでテーブルにパソコンを広げさせてもらった。このお店にパソコンを持ち込んだのはこれが初めてである。

インド人シェフの青年が「社長、ライトいる？」を天井を指して聞いてくれる（「社長」というのはこのお店だけで使われている私のニックネームである）。私が座っているあたりが、まわりに比べて少々暗かったのだ。「ああ、いらぬいいらぬ」と断ったのだけど、その言い方が、なんだか社長っぽく響いてしまってちょっと後悔した。シェフは今日もサラダを「サービス」と言って持ってきててくれた。ビリヤニ頼んでないのに。最近生野菜を食べられてないからありがたいような、とはいえば量が多すぎて余計なお世話のような……。

しかし暑い。梅雨はどこに行ってしまったのかと思ってたら、梅雨前線ごと消えてしまったらしい。天気アプリによると外は32度ある。

お店を出る時、以前と同じく社長におごってもらってしまった。「だめだよ～」と言ってお金を払おうとしたのだけど、「いいからいいから。またお願いします」と、受け取ってもらえなかった。昨年のゴールデンウィークに、大勢引き連れて連日ビリヤニを食べに来たことがよっぽど印象に残っているらしい。

外に出たとたん、凄まじいまでの日差し。これはもう「ソーラービーム」と呼びたい。陽が沈むとホッとする。魔神が襲来するみたいに、陽がのぼると一気に地上の気温が上がり、車内もサウナ状態になり、私はその場所にいられなくなる。もちろん壁もそうなんだが、この炎天下では「屋根」の偉大さを実感する。人間が大地の上で生きるにあたり、その体を死なないようにしておるために立ち上げる、最も根源的なシェルター。それが屋根だ。

6月23日

朝からZOOMミーティングと、昼過ぎからはオンラインのトークイベントに出て1日が終わった。

6月24日



念願の曇りの日。千載一遇のチャンスなので、床作りを中断して草屋根の制作を行う。まずは屋根の波板を固定しているビスの頭に引っ掛けるようにして、麻紐をぐるぐると巻きつける（左写真）。こうすることで後に載せる藁が固定できるようになる。それから「北アルプス国際芸術祭」のときに使った藁を再利用。屋根の上にぽいぽいと放り投げ、麻紐にくくりつけていく。これが土留めになる。



屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日



(放り投げられた土は、空中でダイヤモンドになる)

最後に、土を載せる。版築壁の制作で余った土の山が残っているので、そこにスコップを入れて土を掘り出し、遠心力の助けも借りつつ、屋根の上に放り投げる。何杯も何杯も。

今年で37歳になるけど、こんな動きをしたのは生まれて初めてだった。

腕も足も腰も背筋もフル活用の全身運動で、開始1分で私は汗だくになり、翌日の筋肉痛の心配をはじめた。

スコップの先にのっている土は、少量でもすごく重い。それを何度も高さ2mに放り投げる。なにか、これに似たスポーツはあったかなと思考を巡らせてみたが、特に思い当たらなかった。



もっと効率のいい方法はないかと考えて、テミをつかうことにした（左写真）。これに土を盛ってから、脚立で屋根の上にひとつひとつ載せていったほうが疲れない。疲れないということは、効率がよいということでもある。

とはいえ、正直ひとりでやる作業ではなかつたかもしれない。我ながらよくやつたと思う。「土を屋根の上に運ぶなんて、ひとりでできる作業なのか？」なんてことを考えずに、アホみたいに、とりあえずスコップを手に取って作業を始めてしまったのがむしろよかったです。下手に考え込んでしまっていたら、怯んで着手することすらできなかつただろう。やりはじめてからやり終えるまで、「できない」「終わらない」というイメージを抱くことがなかつた。それが土屋根の実現を可能にした（下写真）。まさか1日ができるとは自分でも思つていなかつた。

高校の部活動のとき以来の大量の汗をかき、途中でTシャツも替えた。明日が雨予報なので、いそいで終わらせたかった、ということもある。雨で重くなつた土をぶん投げるのは勘弁ねがいたいので。

これで本堂の外見はだいぶ完成に近づいた。ドアをつけたり、まだ変わるところはあるが、草屋根と版築の壁は完成だ。草が生えるのが楽しみ。



屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日

<コラムコーナー トカゲとの交流>



スコップでざくざくと土の山を切り崩しているとき、山のてっぺんのあたりで何かがちいさく動いた。手を止めて近づいてみると横穴があいていて、なかにトカゲがいた。顔面のツヤと色から判断するに、ニホントカゲだと思う。巣の中でじつとうずくまり、外の様子を観察している。いくつもの白い卵を抱えている。トカゲの卵というものを初めて見た。この細い体から出てきたことが信じられないほど大きい。私は彼女の巣の一部を壊してしまったらしい。ブルーシートに覆われていた土の山の中に彼女は潜り込み、出産して、ここで卵を温めていたのだろう。ぎりぎり、トカゲと卵にシャベルのきっさきが突き刺さらなくてよかった。人間に例えるなら、寝室で子守をしていたら超大型のブルドーザーのバケットが外壁をぶち破ってきて、ベッドから数センチ先までをまるごとかつさらい、部屋が外から丸見えになっちゃった、みたいな感じだろう。びっくりしただろう。とりあえず私は日本語で謝った。



やがてトカゲはなにやらもぞもぞと動きだした。その拍子に、入り口ちかくにあった卵のいくつかがぼろぼろと巣の外に落ちた。母親は壊された巣を補修しようとしていた。急に外気に露出してしまった卵を守るため、巣を拡張しようとしている。からだをよじって穴の奥へ行って、両手で土をかき出している。そして自分でも気が付かないうちに、自身の長い体が卵にぶつかって穴の入り口まで押しやってしまう。母親はそれに気がつき、振り返って、卵を穴の中へ戻すために口で挟もうとするのだが、どうにも不器用で、結果的に自分の口先で卵を穴の外に落としてしまった。

トカゲは、自分で落とした卵をしばらく呆然と見つめていた。何秒間か、身動き一つせず、じっと穴の下に落ちた卵を見つめていた（左写真）。あまりにもいたたまれない。

私は卵をグローブ越しにそっと
つまみ、手にのせた（右写
真）。穴の中では白く見えた卵
は、わずかなピンクを湛えていた。
硬そうにみえた殻は、お
もったよりもやわらかくてふわ
ふわだった。



母親が上半身を穴の奥に突っ込み、巣の補修作業に没頭しているすきを見計らって、私は卵を巣の入口に戻した。さっき落ちたはずの卵が戻ってきたことが不思議なのか、彼女はそれをしばらくじっと見つめていた。でも、ちゃんとそれが自分の卵だとわかっていた。やがて彼女はその卵をくわえ、巣の中に引っ張り込んだ。

卵は全部で4個落ちていて、最初の2個はすんなり穴の奥にしまわれていった。だが3個目にして、彼女は自分の口の操作を誤り、再び穴から落としてしまった。そして、それをまた呆然と見つめている。なんて愛くるしい生き物なんだと思った。

私はそれを拾って、再び巣に戻した。このとき彼女は、黒くて大きななぞの物体が、自分の卵をつまんで穴に戻しているところを目の前で目撃した。それでも母親は逃げ

なかつた。ただじつと、卵が巣の入り口に戻されるのを眺めていた。私が卵から手を離すと、彼女はその卵をきちんとくわえて穴の奥へしまいこんだ。この瞬間、種の違いを超えた命のリレーが成立したのだ。トカゲの心境として、理由はまったくわからないけど大きな動物が自分の卵を戻した、ということを理解したのか、何が起きたのかはわからないけど卵が戻って来ただので、その事実をただ受け入れたのか、どちらなのかはわからないが、たしかにリレーは成立した。4個目の卵も何度か同じような失敗を繰り返したのち、無事に巣の中にしまわれていった。

私は、子供のときに飼っていたキノボリトカゲのことを思い出した。ゴーヤと名付けて、結構かわいがっていた。水槽から出して室内を散歩させたり、肩にのせたりと、意思の疎通ができていた。あのときの、種や属性の違いを超えてなにかが通じたときの、言いようのない喜びの感触を思い出した。

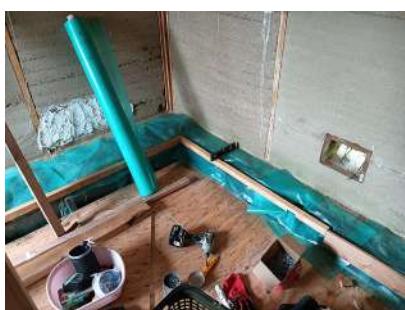
屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日

私は「ひとりじゃなかった」と思った。ずっと、ひとりで作業をしているもんだと思っていたけど、穴の中からじつとこちらの様子をうかがっているトカゲを眺めているうちに、じわじわと込み上げてきたのは、自分はひとりではなかつたんだという発見である。同じ敷地内に住んでるやつが、ここにいたじゃないか、と。私の目線からは見えにくいで、村上勉強堂は、大勢の同居人が住んでいる集合住宅なのである。

「今日はお祝いだ！」と、みきの湯でラーメン餃子セットとノンアルコールビールを注文し、一人で乾杯した。寝るときも、すぐ近くで眠っているであろうアイツのことが頭をよぎり、またじわりと嬉しくなった。



6月25日

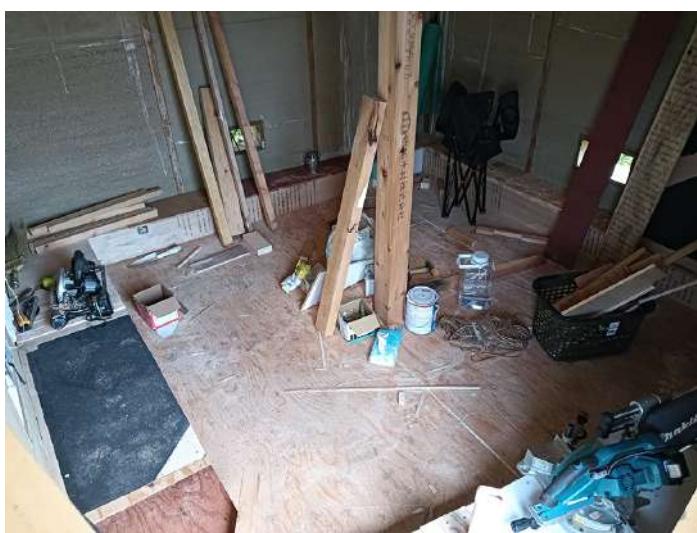
勉強堂は鳥の存在感が大きい。特に朝。一羽、気が狂つたみたいにいろんな声の出し方で鳴いてるやつが上空にいる。よく聞く声だけど、姿は見えない。この以上な切迫感。一体どんな性格なのか。一度のライブでジャズとヒップホップとロックバンドを一人でやっちゃうような落ち着きのなさ。

この日で床の、段差の立ち上がり部分がほぼ完成。壁の基礎になっているコンクリート平板と段差が水平になるようにしながら横材をうち（左写真）、展示で使った木材やその他端材を切り張りした（左下写真）。



<とつぜんの、ビットコインに感動したコーナー>

この作業中、オーディオブックで聞いていた『ニムロッド』という小説がきっかけで、ビットコインの仕組みを初めて知り、そのスマートさとラディカルさに衝撃を受けた。コインそれ自体はどこにも存在せず、その存在しないコインの移動を記録した帳簿だけが所有者のあいだで共有されていることや、自分が持っている帳簿に世界中のコインの移動を書き込むことでコインがもらえる仕組み（既存の通貨のように銀行が帳簿を管理するのではなく、みんなで帳簿に書き込むことで、中央集権的ではない通貨を実現している）など、お金というものの本質を考えたくなる、実によくできたおもちゃだと思った。



6月26日

いちおう、床が完成した（左写真）。手持ちの材料をつなげまくったので、つぎはぎだらけで情報量が多いけど、床としてはしっかりしている。勉強堂でこんなにちゃんとした「床」を作ったのは初めてである。いままで壁ばかり作っていたのだ。



この日の車中泊の様子

○「みきの湯」で考えたこと

みきの湯では、ロビーから玄関に出るさいに改札機にリストバンドをかざす。そのとき「ポン」という音が鳴る。店員さんは、その音が鳴ると同時に「ありがとうございました」と声をかけてくる。たぶんそういうルールになっているのだろう。リストバンドをかざす前にカウンターの店員に向かって「ありがとうございました」とちらりが挨拶をしても、ほぼ返事は返ってこない。彼女ら彼らはかたくな、私がリストバンドをかざし、「ポン」と音が鳴るのを待っている。ここで「ありがとうございました」を返してしまったら、「ポン」のときにもう一度「ありがとうございました」と言わなければいけない、という心配をしているのかもしれない。挨拶はこのように形骸化していく。

私たちは、コミュニケーションのコストを機会/機械にアウトソーシングしている、と言えるだろう。いちいち気持ちを入れてると疲れてしまうので、しかたのないことだ。

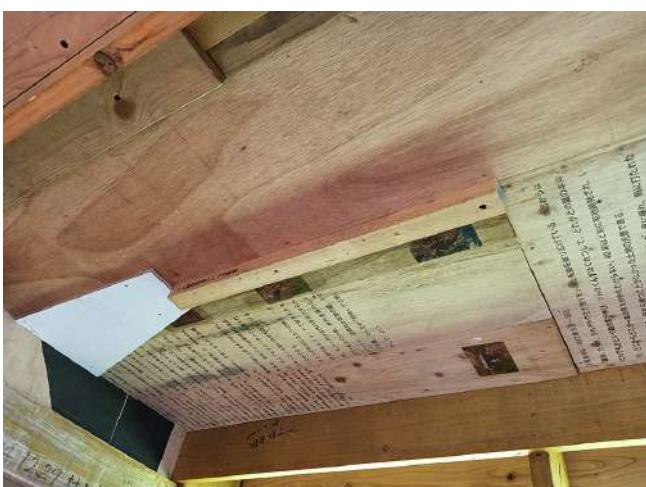
それでも、たまに東京のコンビニなどで、接客マニュアルによって完全にカスタマイズされた人間をみるとショックを受けてしまう。先日は若い男の店員が、目と鼻の先にいる人間に発するにしてはあまりにも大きな声量で「ふくろはりますか？」と私に尋ねてきた。彼は同じ調子で、私が支払うべき金額を伝え、「ありがとうございました、またお越しください」と言った。手元だけに注意を払い、こちらを見たりはしない。こうなってくると、もう私は誰でもいいし、店員も誰でもいい。誰でもいい存在が、誰でもいい存在に対して「ありがとうございました」と挨拶をしている。もはや人間である必要もないだろう。おもしろい状況だと思う。

屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日

7月5~6日



汗だくになりながら天井を張った。手持ちのパネルや角材を丸ノコで切ったりビスで打ったりしながらパズルみたいに隙間を埋めた。床以上に情報量が多い（上写真）。天井は不燃材で作った方がいいので、石膏ボードを買うことも考えたが一人で施工するには石膏ボードは重すぎるし、木材がとにかく余っていた。



また、気化熱で版築の壁がどの程度つめたくなるのかをテストするため、井戸水を西、南、東の外壁にかけてみた。想像以上の吸水性能で、壁一枚でじょうろ1杯の水をすべて吸い込んでしまった。しみ込むスピードも速い。壁の上部から勢いよく水をかけても、水が地面に達する前に壁に吸い込まれてしまう。

屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日

外側から水をしみ込ませたときに、内側までその「冷え」が伝わるかを試したかったのだけど、1日経っても手で触れてわかるような表面温度の変化は内壁には起らなかった。温度変化が内部に伝わる前に、壁がすべてを吸収してしまうらしい。水は外側からではなく、内側からしみ込ませた方がいいようだ。chat GPTにも相談に乗ってもらい、次回は下の方法を試すことにする。

- ・パイプを内壁に張り巡らせ、水中ポンプで組み上げた井戸水をしみ込ませる
- ・ただ、そうすると室内の湿度が上がる。対策として、扇風機で湿気を外に逃がす。
- ・扇風機で壁に風をあてると水の蒸発も促され、壁も冷えやすくなる（空気の流れのもとで初めて水分は気化する。空気が動いていないと水蒸気がその場にたまり、壁付近の湿気が飽和状態（湿度100%）になり、水が気化する隙間がなくなる）

加えて、

- ・外壁にも麻布などを貼付けて毛細管現象でじっくりと面で吸水させる
- ・床下からの冷気を取り入れる
- ・ソーラーチムニーで換気する

などの対策も考えられる

7月31日



久々に勉強堂に来た。朝から1時間ほど草刈り。予想してはいたがものすごく繁茂している。この時期の植物の成長スピードは半端じゃない。でも屋根の上の草は思ったほど生えてなかつた。ひょこひょこと弱々しい草が顔を出しているくらい。

昼、ランドロームに行って、フライドチキンとカットフルーツ盛り合わせパックと飲むヨーグルトと佐野ラーメンのカップ麺を買ってイートインコーナーでランチ。室内着用のおじさんやおばさんが数人、暇そうにテーブルに座っている。みつのカゴにめいっぱいの食材を買い込んでいるひょろとしたおばさんが、購入した食材を「新聞紙回収用」と書かれた大きめのビニール袋にひたすら移し替えている姿が、なかなかに衝撃的な光景だった。袋は何度も使いまわしているものらしく、ビニール袋なのにシワが目立っていた。



チキンとカットフルーツを食べて飲むヨーグルト飲んだら、佐野ラーメンを入れる余裕が胃袋からなくなってしまった。代わりに車に積んでいた「ポケモンヌードル」を持ってきて、お湯を入れて食べた（おまけのシールは「メガリザードンX」だった）。このポケモンヌードルと一緒に買った友達と、シールの中身がわかつたら教える約束をしていたので、写真をラインで送った。

「わたしもメガでした！メガリザードンXです！」

食後コメリに寄って、ドアに使えそうな滑車とレールを物色したが、夜お風呂に行くついでに大きなカインズに寄ったほうがいいものがありそうだと判断して、結局何も買わずに勉強堂に戻り、本堂の中でキャンプチェアに座ってるうちにうとうとしまった。外は暑いが、本堂の中は体を動かさない限り寝できるくらいには涼しい。これはすごいことではないか？ 外気温より3度くらい低い。

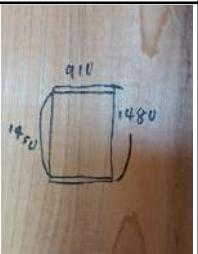
屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日



昼寝の後はドアの制作。蒲田のギャラリー「二人」の個展で使ったベニヤ板2枚と垂木でドア板を作る。コメリに売っていた滑車とアルミアングルのことを思い出し、それでなんとかなりそうだったので再びコメリへ買い出し。耐候性の油性ニスも買う。



ドア板の下部をノミで削り、滑車をふたつ埋め込む。レールにはL字のアルミアングルを使った。これは2010年に「松戸アートラインプロジェクト」という展覧会に、作家として初めて作品を発表したときに私が独自に編み出した、引き戸づくりのオリジナル手法である。17時半にはドアが完成。勉強堂という野生の環境においては、異様なほどスムーズに開閉する引き戸ができた。見た目もいい感じに景色に馴染んでいる。



屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日

あいちトリエンナーレでのコーディネーター仕事のための材料と道具一式を車に積んで、その日のうちに勉強堂を出る。次来るまでに、壁の内側に水を撒くシステムを考えて部品を購入しておきたい。それと、東京のアトリエの倉庫に保管してある、スポンサーLOGOの入ったタイルも持ってきて床に敷きたい。あとコットを持ってきて本堂の中で寝れるようにしたい。

<今回出会った虫たちメモ>



夏真っ盛りなので、虫たちも活発である。草むらをすこし歩くだけで嘘み大にでかいカマキリやバッタが足元を飛んでいくし、地面に目をやればオケラが草のあいだを這い回っている。久しぶりにオオスカシバも見つけた。私が子どもの頃はそこら中に飛んでいた虫だけど、最近見かけなくなっていたので見つけたときは嬉しくなって思わず日本語で声をかけてしまった。

<アイデアメモ>

- ・床下の防湿についてもなにか対策が必要かもしれない。名古屋のプロジェクトのために買った防湿シートが余っている→実行済み
- ・有野実苑キャンプ場で落ち葉がもらえるという情報
- ・除湿機で室内の空気中の水分を集めて外壁にしみこませる（21美のスーパーフレックスの作品から）→除湿機を買うのはなんか違う
- ・版築壁+高床という選択肢。湿度を抑えるため（梶川さんとの話から）→今から高床にはできない。手遅れ
- ・宮崎竜成さんからのアイデア。水中ポンプと水槽用パーツを使った水循環システムで壁に散水する→実行準備中
- ・4月によもぎらしき植物がいっぱい生えていて、本当によもぎなのかどうかの確認はもてなかつたのだけど、内田さんがたくさん摘んでいった。よもぎは新芽が美味しいらしい。成長したら乾燥させて燃やして虫よけにしたり、焼酎につけて虫よけにしたり→要検証
- ・勉強堂が完成したら、そこで期間限定のお店をやる。石とか貝殻とか売る。スコーンとコーヒー出したり→やりたい
- ・勉強堂Tシャツつくる→やりたい。それで資金を集められたら最高
- ・桜を植えて毎年花見したい→やりたい。恒例行事にしたらよさそう



<みきの湯での発見メモ>

5月18日、みきの湯にて。

みきの湯は大好きな銭湯なのだが、レストランに超大画面のプロジェクション（しかも4つも）で地上波テレビ番組が壁面にうつされていることだけが不満だった。音もなかなかのボリュームなので、耳も目もそちらにとられてしまうのである。なんでわざわざこんなにも大画面でテレビを見せつてくるのか、その理由が全くわからなかったのだが、この日、壁面から遠い位置にあるカウンターで待機している従業員が、テレビを食い入るように見ていて、もしかしてこのためなのではないかと思った、という発見。



<アーリウスでの出来事メモ>

4月25日夜。久々のアーリウスへ。アセフさんとの会話。

アセフさん「社長、ひとり？」（私はこの店では「社長」と呼ばれている）

私「ひとり」

アセフさん「さみしいねえ」

これには笑ってしまった。「うるせえ」と思った。

アセフさん「社長、最近どう？ いそがしい？」

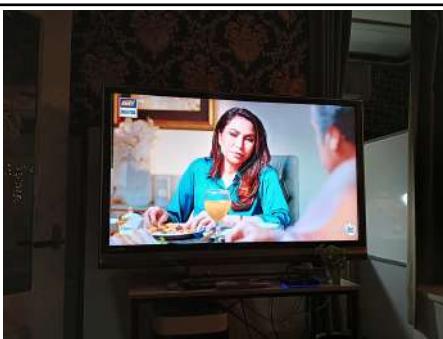
私「いそがしいね！」

アセフさん「それはいいね、うちはひまだよ！ 社長が客連れてこないと」

屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日



「家はどうなったの？」と聞かれたので、「まだつくってる」と答えたアセフさんは笑っていた。

「それは見たいね。見たいよ。これ、パキスタンのドラマ。よかつたら見てね。なにが起きてるのかぜんぜんわからないと思うけど。ごゆっくり～」

5月23日。アーリウスでお昼ご飯を食べ、お金を払おうとしたら

「社長、今日はいいよ。サービス！」

とアセフさんが言う。

「え、なんで？」と聞いたら、

「いつも来てくれるから。またお客様つれてきてください！」

と言われてしまった。礼を言って、また連れてくることを約束して店を出る。

7月6日。アセフさんから「車いらない？」と言われた。駐車場に停めてあるというので見せてもらったら、かなり状態のいい軽バンだった。走行距離は9万キロ。提示された金額も安かったのでちょっと迷ってしまったが、「もう軽バンもてるからなあ」と断った。あとマンゴーも買った。

「めっちゃ美味しいマンゴー届いたから、後でよかつたら見て」と、なぜか耳元で囁いてきた。自分が常連みたいで嬉しい。帰り道に参院選の掲示板をみかけ、参政党候補者のポスターにでかでかと「日本人ファースト」と書いてあり、恥ずかしきアセフさんや、アーリウスのインド人シェフたちの目に入つてほしくないと思った。でもインド人シェフはおそらく日本語が読めないのでノーダダメージだろう。

<「食堂松下」での出来事メモ>

5月4日。勉強堂から最も近い食堂「食堂松下」で「5月末で閉店」という張り紙を発見。最後にみんなで行っておこうと、池田さんと内田さんと村上でお昼を食べに行く。会計のときに「閉店しちゃうんですね」と女将さんに言つたら「そうなんです。時々きていただいてまひたよね。ありがとうございます」と、覚えててくれ、嬉しくなる。



5月29日。焼肉定食。これで1000円、しかもドリンク付きである。惜しい店が閉店してしまう。

5月21日。聞こえてきた客と店員さんの会話によると、閉店の主な理由は設備の老朽化っぽい。

「ここなくなるの、さびしいわねえ。みんなに言われるでしょう」

と常連らしきおばちゃんに言われ

「排水がちょっと…あと冷蔵庫も。直すってなると、お金かかるしねえ、（このさき店を）やる人もいないし」と答えていた。

<裏の滝口さんとの出来事メモ>

5月4日12時49分

滝口さんがやってきて、以前から頼まれていた、モルタルを練る作業をやってくれないかという話について、

「明後日雨だし、あまり急ぎではないからまた次の機会で大丈夫」

と言いにきてくれた。ついでに村上勉強堂について

屋根の制作<後編>、いろんなエネルギーの話、トカゲとの交流、本堂建設完了

作成者：村上 慧

2025年8月29日

「あそこ、なんか大勢でへんなもの作ってた。気持ち悪いねえ、という人がいたからね、私、言つきました。みんな立派な人ですよ。彼は、研究者なんですよ。話せばわかるって言つきました」

と報告してくれた。ありがたい。ひとりでも理解してくれている人が近所にいるのは本当にありがたい。知らない人が見たら、かなり異様な光景だと思う。よほどの変人にちがいないと、私でも思うだろう。

6月2日にも滝口さんが訪ねてきた。ちょうど屋根を作ってる最中で、ガルバリウム波板をグラインダで切断する作業をしているところだったので、

「波板切るのうるさいですよね、すいません」

と詫びたら、滝口さんはポカンとした顔になり、手を顔の前でぶんぶん振りながら

「ぜんぜんぜんぜん！ 遠慮することない！」

と言ってくれた。

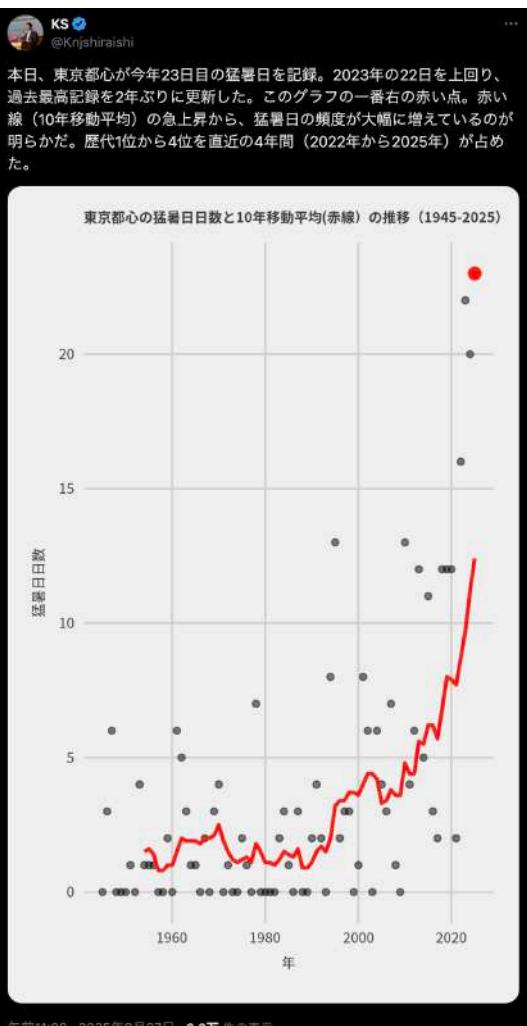
「夜中の2時3時にやられたら迷惑だけど、そうじゃないんだから！」

その言い方が、堂々とやれ！ と背中を押してくれているみたいで、嬉しくなる。

おわりに

この場所に土地を購入したのが3年前。本堂がおおむね完成し、ここから村上勉強堂の制作は次のフェーズに入る。すなわち、寝泊まりする場所にしていくための環境整備と、冷暖房の実験を始めていく。その過程で私はおそらく「快適さとはなにか」という問いにぶつかるだろう。

同時に、初期に建設したコンポストトイレに生じている問題を後回しにし続けているので、その対策も必要だろう。ドアはゾンビ映画でゾンビが着てる服みたいにボロボロだし、穴は排泄物でいっぱいになってしまっている。本当になんとかしないと……。



文責：村上慧

<追伸>

冒頭で最近の暑さについて書いたけど、この報告書を書き始めてからもう1ヶ月半経っているので、すでに情報が古くなっている。8月27日のニュースでは東京都心が今年23日目の猛暑日日数を記録し、過去最高を2年ぶりに更新したという。

左の画像は環境政策研究者の白石賢司さんのSNSでのポスト。あまりにも衝撃的だったので、勝手ながらシェアしてもらう。(<https://x.com/Knjshiraishi/status/1960522788156162414> より)

東京都心の猛暑日(最高気温35度以上の日)の日数が、5年前と比べて倍近くに増えている。2000年代には一度も記録しなかった夏だってあるのに…。去年も同じグラフを見て驚いた記憶があるけど、今年はまだ夏が続いている。いったいどうなってんだ。何年も前から気候危機と言われ続けているけど、その変化の激しさを、きちんと想像できているのか？